わんりぃ
109号
2005/12/1

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58　田井方
〒195-0053　TEL&FAX：042-734-5100
http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/
Eメール：wanli@m2.ocv.ne.jp
ホームページは毎月５日頃までに更新を務めています。

撮影地：インド　　撮影：大久保聡

笑顔が美しくなる
「中国語で歌おう会」 会員募集中！
明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう！

12月の講座　12月16日（金）
19：00～20：45
麻生市民館・視聴覚室（新百合ヶ丘駅下車北口3分）

●12月の練習曲：**「又見炊煙」**（日本の歌「里の秋」）
の復習とクリスマスソングの「平安夜」（聖夜）を歌いましょう！

●指導：趙鳳英さん（中国四川省出身歌手）
体験参加（1500円）歓迎します。ご自由にご参加ください!!
なお、ご参加される方は録音機をお持ちください。
問合せは、‘わんりぃ’事務局へどうぞ
TEL/FAX：042-734-5100

‘わんりぃ’109号の主な目次

北京からこんにちわⅤ ……2
中国を読む㉘［ず・ぼん-3］……4
黄土高原来信第二部「陝北女娃」2 亚亚 ……5
「陝北女娃」亚亚（原文）……6
媛媛来信19・中山服の由来 ……7
ピースボート105日間の旅 Ⅸ……8
松本杏花さんの俳句 ……9
ラオスの山からだより Ⅵ ……10
ビエンチャン滞在記 ……12
アフリカとの出会い5・エイズ幹線（感染）道路 ……13
「あなたの知らないアフリカ」3（講演会より）……14
【活動の報告】2005夢広場 ……15
‘わんりぃ’掲示板 ……16

今年も歳月が過ぎる早さを知る季節になりました。振り返れば、いい仲間たちと仲良く手を携えて、ささやかながらいい活動ができたのではないでしょうか。‘わんりぃ’の‘わ’は‘和’、そして‘輪’。来年も皆々様のサポートをよろしくお願いします。

北京からこんにちわ！―⑤ ひとり旅の巻

有為楠（ういくす） 君代

⌘大家好！

行って来ました、念願の中国国内一人旅！ 目的地は長沙です。

北京駅の雑踏は、先日眼にしているので難なくクリア、列車ごとに指定された待合所で改札を待ちました。待合室の壁面いっぱいにキオスクのような売店があり、何でも売っているようでした。私は、あるかどうか心配しながら、ラジオのイヤホーンが欲しい言うとちゃんとあるではありませんか。

寝台は軟臥の下段を選びましたが何とカーテンがありません。4床が一つのコンパートメントで4人旅なら最高ですが、カーテンがないので、1人旅では落ち着きません。現に、私のコンパートメントは、男性4人連れの三人が一緒で、一人だけ（私が先に買っていたので）隣のコンパートメントの上段だったようです。それで、その下段の人に何がしかのお金を払って位置を交換してもらい、私に、その位置に移ってくれないかと相談に来ました。私も、男三人と一緒より良いと思って交渉に応じました。隣の部屋は、交渉に応じて上段に移った30代の男性と、20歳前後の娘さんとお父さんでしたが、ここでも私は浮いていました。話し好きな女性でもいて話しかけてくれると、出来ないながらも会話が成立するのでしょうが…。一晩中、まったく口を開かずに過ごしました。寝台の足元にスクリーンが嵌め込まれていて、イヤホーンで音を聞くようになっていましたので、マンガの「孫悟空」を見て、映画「英雄」をもう一度見ました。

翌朝は5時半に眼が覚めました。混む前にと洗面所に行って身支度をし、また寝台に戻って明るくなるのを待ちました。明るくなって車窓から外の景色を眺めると、緑と水が多くて、日本の田園風景のようでした。決定的に違うのは土の赤さです。日本の赤土などは「白土」と言いたい程、真っ赤でした。でも、畑には緑があふれていて、「南方は農作物の宝庫」ということを実感しました。

北京を前日16：00に発ち、ほぼ予定通り、07：40に長沙の駅に到着。友人が駅で迎えてくれました。駅で荷物を預け、8：30の岳陽行き列車に乗りました。座席の指定が無く、2階建て車両の階段のところに座っていますと、寝ていた人が起きてくれたり、若者が、「ここに座れば…」と言って黒ビニールの大きな荷物の上に座らせてくれたりで、どうにか腰を下ろすことが出来ました。この列車は、何と深圳から岳陽までのものでした。

2時間ほど汽車に揺られて岳陽につきました。駅前は、よく見るような広場ですが人は大分少ないです。中国の駅の構造はどこも同じようで、出口のはるか彼方に入り口があり、切符売り場もその近くなので、そこまで行って帰りの切符を買いました。中国の車両は日本のより大きいような気がします。中には2階建て車両もあり、3人がけ座席もあって、乗車定員は多く、しかも連結車両数も多いですから、一度に運べる人数はかなり多いのでしょう。

（05年10月10日）

⌘大家好！

岳陽楼は、駅から路線バスで6停留所程行ったところ、ただの商店街で、車掌さんに「ここが岳陽楼」と降ろされました。怪訝な顔をすると「一直走！（真っ直ぐ行け）」とのこと。5分ほどで左側に観光地としては地味な看板を掲げた入り口があり、車が出入りしていました。入り口を入ると駐車場があり、右手に楼の門が見え発券所があります。切符を買って門を入ると、左手に洞庭湖が見えてきました。入って分かったのですが、通ってきたバス通りの左側の家並みのすぐ裏手下まで湖岸がせまっているのでした。

写真でおなじみの楼が目の前にあって、ちょっと興奮しました。楼に登ると、内部には「岳陽楼記」の書があり、中国人団体旅行のガイドが大きな声で説明をしていました。楼内は薄暗く、人が多く、マイクの声が大き過ぎるので、回廊に逃れ出ますと眼の下は洞庭湖で、船がいっぱい行き来してます。遊覧船よりも、作業船や運搬船が多いのが印象的でした。

楼外の庭の石畳を下っていくと、塀に突き当たりますが、その塀の外はすぐ水辺です。閉まった門の脇から覗くと水際まで石段が続き、その先に幅50センチほどの砂地があります。昔はこの階段を下りてそのまま船に乗り込んだのだろうと想像しました。

昼食は、バス通りの小さいけれど小奇麗な回族のお店で、「辛くない」と言われて「牛肉拉麺」を頼みました。それがかなり辛くて、美味しかったのですが全部は食べられませんでした。そこで働いていた男の子が、小柄で可愛い顔でどう見ても10歳位にしか見えません。「いくつ？」と聞くと「12歳」と答えます。お金も扱っていましたから、本当に「小柄な12歳」かもしれませんが、私の個人的印象では「とてもしっかりした10歳」です。余り小さい子を働かせるのは禁止されているので、お客さんに訊かれた時の「自称12歳」かと思いました。元気に楽しそうに働いていて、お店にぴったりの「看板息子（？）」でした。

店員さんにバス乗り場を訊くと、道の反対側で待っていれば良いと言われ、半信半疑で待っていました。何台かバスが通り過ぎて、ここじゃだめなんだと思い始めたとき、散歩のおじさんが、「バス停はもっと先だよ」と教えてくれました。私たちは「駅へ行くバスは？」と訊いたのですが、店員さんはタクシーで行くと勘違いして「道の向こう側で拾えば良い」と教えてくれたようでした。降りたバス停より少し先まで歩いてバス停を見つけ、岳陽の駅まで帰ってきました。

列車は遅れて来ました。切符を持っている人だけしかプラットホームに行けないのですが、すごい人でこれでは座れないと覚悟しました。案の定、座り込む場所もない混みようで20分ほど立っていました。運良く車両の入り口付近でスペースが出来、新聞紙を敷いて床に座りました。座り込んで小1時間して、あと40分ほどの我慢と思った

頃、周りの人がもぞもぞはじめ、途中駅かと思いきや、駅名を聞くと、何と「長沙」というではありませんか！ 往きより30分も速い、ノンストップの汽車でした。知らずに買った切符でしたが、ラッキーでした。

長沙の駅で荷物を受け取り、ホテルへ向かいました。長沙で一番のホテルだそうで、綺麗でサービスもよく、満足のいくホテルでした。夕食はホテル内の飲茶形式のところで済ませました。ささやかな夕食ですが、ゆったりとした雰囲気の中で落ち着いていただけたので、昨夜からの気分的、身体的緊張感がいっぺんに解けていくようでした。

（10月11日）

⌘大家好！

長沙の２日目は、ホテルでの朝食からスタートです。洋式と中国式料理が用意されていて、なかなか美味しいものでした。卵が、茶卵だけしかなかったので、「スクランブルエッグはないの？」と訊いてみました。「ない」というので「それならいい」と言って席に着いたのですが、何と、あとから作って持ってきてくれたのです。味にもサービスにも満足して部屋に戻りました。

タクシーで岳麓書院へ案内されました。事前の勉強が不足しているので、「何だろう？」とおもいましたら、宋代の皇帝の書物保管庫、つまり図書館と分かりました。今は、湖南大学の一部になっていて、見学者が大勢来ていました。建物は、門を入ると石畳の前庭があり、正面の３，４段の石段を登った所に主閣があって、左右に回廊が伸びているような形式で、北京あたりでも見かけるような気がしますが、雰囲気が日本人好みです。山の麓で、敷地に高低差があるせいでしょうか、ちょっとしたしつらえも気が利いていて、懐かしさを感じました。日本の古い寺社建築などは皆、中国のこの時代とそれ以前の様式を取り入れているのですから、北京近郊の清朝の建築物よりも親しみを覚えるのは当然ですよね。

庭の池には鯉が泳いで、静かな雰囲気に動きを添えています。中庭の一角に高さ５メートル以上もある木があり、赤ん坊の頭程もある実がたくさんぶら下がっています。周りの人に「あれは何？」と訊くと、「柚子」とのこと。見たところ果実の表面が瓜のようで「まさか」と思いましたが、真下に行ってよく見ると、確かに柑橘系の肌をしています。

午後はいよいよ本命の、湖南省博物館に安置されている漢王墓出土のミイラさんに会いに行きました。いろいろな出土品の展示の最後に、ガラスのケースに収まったミイラを上から覗くような感じで見学します。ミイラという語感から受ける干からびた感じは無く、なんだか覗くのが申し訳ないようでした。お顔の様子など、そのまま少しだけ肉をつければ、北京でどこにでもいるおばさんという雰囲気です。本当にどこかでお会いしたような気がします。この後２階で、地下まで吹き抜けになった発掘現場の実物大模型を見ました。これで、はるばる長沙に来た甲斐がありました。

夕食は、ショッピングセンターの上部の食堂で辛さで知られた湖南料理を味わい、食後は、湘江まで歩いて夜景を楽しみました。夜の散歩には丁度いい気候で、気持ちいい風に吹かれながら、「湘江」を往来する船を眺めました。

（10月12日）

⌘大家好！

今日は、長沙での最後の日です。チェックアウトを済ませ、白沙井という泉に行きました。かなり昔から有名で、古い詩や文章にその存在が言われているそうで、少なくとも1000年は経つのでしょう。ごく普通の商店街の脇の一段低くなったところに公園があります。昔はがけ下だったのでしょうか。泉のほとりには、ものすごく大きな石碑があって、水という字が、様々な書体で150位も彫ってありました。字の幾つかには、王義之とか、毛沢東とか、書いた人の名前が書いてありますが、殆どは水という字だけです。象形文字から前衛的な字まであり、つくづく中国は、文字と石の国だなァと思いました。水は、下から湧き出るタイプで、水の溜まり場は、地面より３センチほどの縁で仕切られているだけです。たくさんの人々が、思い思いに水を汲んでペットボトルやタンクに入れて持って帰っていました。

時間があるので湘江の畔に新しく出来た「杜甫江閣」へ向いました。これは今年10月１日にオープンしたばかりの、新設の観光名所だそうです。例のごとく庇のそりあがった形で２層の建築物で、庭には御影石がいくつもあって、杜甫の詩を有名な書家が書いたものが彫り付けてあります。湘江の風に吹かれながら杜甫の詩を楽しむのも良いものです。

旅の最後は漢王墓（馬王堆）の発掘現場です。訪れる人は少ないそうですが、折角なので現場を見たいと思いました。病院の建設工事中に発見とのことで、現場は、馬王堆病院の敷地内にあります。病院の門のわきに、病院施設の案内図があり、その中に馬王堆の位置も書いてあります。門を自由に通って左手の小高い木立を上ると小屋があり、馬王堆発掘現場と表示があり、入場料２元でした。赤土の固い斜面を、丁度階段ピラミッドを逆さに置いたように、底の長方形の穴に向かって、４層の段があり、一箇所だけ全体が斜面となるように削ってあります。中のものは皆博物館にあるのですから空っぽですが、なんだかぞくぞくするような気持ちの高ぶりを覚えました。　（10月13日）

⌘大家好！

長沙から上海へは、南方航空で飛びました。飛行機は、まだ新しいボーイング737で、離陸一着陸も予定通りの、出来すぎた飛行でした。上海では、仕事を終えた友人の出迎えで友人のマンションへ行きました。

翌日、ゆっくり朝食を済ませ、友人と一緒に豫園へ行き庭園を見物。長沙と同じく、この豫園のような庭園はしっくり肌になじみます。豫園を出て、外の商店街を人ごみに揉まれながら歩いて、小龍包のお店の行列に加わりました。レストランでの食事は時間がかかりそうなので、店先で買って外で食べるほうを選びましたが、その行列がなかなか進みません。遅い、遅いと文句を言いながら、途中で抜けるのももったいない気がして、結局買うまで２時間

近く並んでしまいました。

タクシーで南京東路まで行き、きょろきょろしながら外灘へたどり着きました。外灘に出て、浦東を眺め、渡し舟に乗って浦東に渡って外灘をながめました。西日を背にした外灘の眺めはすてきでした。地下鉄で南京東路まで戻り、ホテルの４階の広東料理店で美味しい広東料理を頂きました。この店は日本人に人気の店だそうです。それから又地下鉄で浦東地区まで戻って、金茂大廈の77階へのぼり、上海の夜景を楽しみました。それは綺麗で、何と行ったら良いのか、言葉を失ってしまいました。にぎやかな地上の光に対抗する気も無く、半月がひっそりと東の空に張り付いているのが面白く、それはそれで風情があっていいものでした。

翌日は先ずバスで花園飯店へ飛行機の切符を取りに行きました。花園飯店は、フランスの古い建物を残しながら近代的な建築を添えているとか、雰囲気のある高級ホテルで、沢山の日本人が泊まっていました。キップを受け取ってから庭を散歩してみましたら、緑の芝生に白い椅子を40脚ほど並べて結婚式の準備中でした。衣装を着けた新郎新婦が、空の椅子席に向かってお辞儀をしたり、誓いの言葉でしょうか、読む様子をしたりと練習をしていました。中国では、結婚式は無くて、届けとレストラン等でのパーティーだけだと聞いていましたけれど、こんな式をするようになったのでしょうか。

花園飯店の南側に淮海路という賑やかな道があって時間をつぶすのに良いとのこと。洒落たお店が続き、日曜日で若い人たちが多数歩いていました。通りのあちこちでハンドバッグの写真を見せて、客引きをしてます。無視していましたが、「小姐！見て、見て！」と若いお兄さんの呼び声に思わず立ち止まりそうになりました。

ちょっと早かったのですが、休憩と早めのお昼と思って、ミスタードーナッツに入りました。ドーナッツ２つとコーヒーを頼んでお金を払おうとするのですが、なかなかレジを打ってくれません。「まだ？」と聞くと、レジの時計を見せながら「ちょっと待って！」と言うのです。時計は10時59分を指していました。それが11時になると、にっこりして「はい、18元」と言うではありませんか。私は気がつかなかったのですが、11時になると、タイムサービスで、コーヒーとドーナッツ２つの組み合わせが一律18元になるので、待っていてくれたのでした。

中国でこんなサービスを受けるなんて考えても見ませんでした。こんな驚きをもって私の今回の旅は終わりましたが、私が年を取っている間に、中国も変わったなァと実感しました。　（10月14日）

中国を読む㉘　「ず・ぼん③」　ず・ぼん3編集委員会・編　ポット出版

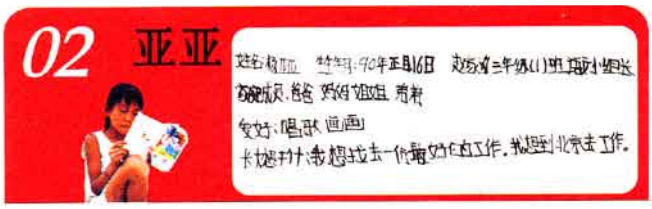
図書館関係者に読まれている定期刊行物がある。ポット出版が出している「ず・ぼん」。図書館についての事件や問題提起など多彩なテーマで、それぞれ第一線の人たちが原稿を寄せている。年に1回のペースで現在第11号まで出ているが、今回紹介するのは第3号。気になった特集は「図書館人が植民地でやったこと」。1996年に発行されたものだ。最初、このテーマを見たとき、私は「図書館人が植民地でやった“いい”こと」だと思っていた。実際はその逆で、図書館人の戦争責任を問うている。

南満州鉄道株式会社（満鉄）の図書館事業は1907年に始まり、1934年には沿線付属地に23館（他に6分館）できたという。これらの図書館は思想教育機関としての役割が濃厚だった。選書には充分な注意が払われ、現地の人たちを皇民化するためのイデオロギーが注入された。そのため、そこで働いた図書館人たちの戦後責任が問われてくる。

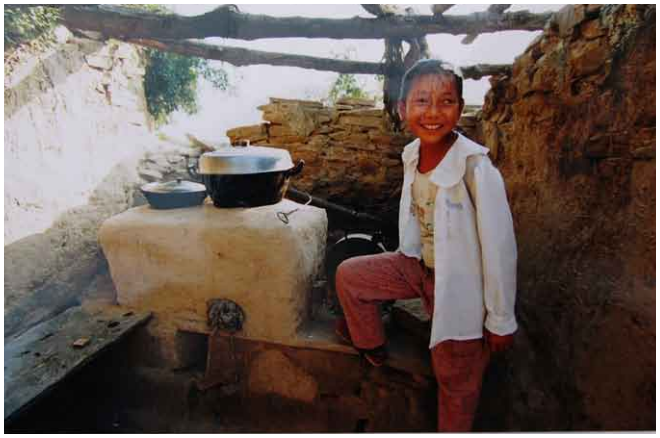
「図書館人の戦争責任意識」というタイトルで寄稿した東條文規氏は、そのなかで三人の図書館人を紹介する。一人は衛藤利夫。満鉄奉天図書館を大図書館に成長させた人物だ。関東軍とも積極的に関わり「満州建国前夜の日支名士座談会」にも出席し、石原莞爾の「満州独立論」に理解を示した。彼は満州に大きな希望を持ち、図書館人として尽力し、結果、夢打ち砕かれた。二人目の満鉄大連図書館長・柿沼介は、軍と関わることを拒否し、資料の収集や作成に没頭した。社会のなかの図書館という考えがなく、当然戦争責任を感じることもなく、淡々と自分の仕事をこなした。三人目にあたる国立奉天図書館長の弥吉光長は、玉音放送を聞くやいなや、図書館の文化財を護るよう、職員に言い含めた。資料の散逸を防いだことを戦後も誇りとした人だった。

結局、図書館人たちは時代に流された。疑問を持たず、自分の仕事を一生懸命やることがすなわち軍に貢献することになった。そして図書館人に限らず、殆どの人たちがそうだった。それはいつの時代も変わらずにある構図だ。親鸞の言葉に「己がよくて人殺しをせぬにあらず」というのがある。これまで自分が人殺しをしなかったのは、人を殺さなくてもいい状況にあったから、という意味。ふと思い出した。

（真中智子）



2001年8月のある日、私は南塬村の少女たちの写真を懐に村を訪ねますと、子供たちが村はずれの胡桃の老木の下の窰洞の前に案内してくれました。つまり此処が亚亚の家というわけです。彼女のお母さんが「娘は畑へスイカの見張りに行ってるよ」と畑の方向を指差しました。私はお母さんが指差した方向に向って、腰の高さほどに伸びたトウモロコシ畑まで来ますと、遠くに草葺の掛け小屋らしいものが見えます。近寄って見ますと、四本の丸太を支え棒にした三角形の掛け小屋風の棚で、真ん中に何枚かの板を渡し、両脇はぼろ布と草で焼け付く太陽の陽射しを遮っています。中で女の子と女の子より小さい男の子が座って本を読んでいました。同行の少女が、この女の子が、写真を撮ったとき胡桃の木の下で立っていた亚亚だと教えてくれました。当時、女の子はカメラの前でとてもはにかんだきまり悪そうな様子で、その場のひょうきんな男の子たちと対照的でした。けれども今の亚亚は写真を手にし、笑い喋り、顔立ちも以前よりずっと器量よしになっていました。弟の東東もウサギのような歯をむき出して無邪気に笑っています。



厳しい陽射しの下、スイカ畑の中の掛け小屋を時折熱風が吹き抜けて行きます。小屋の周りは一面緑の西瓜畑で、畑のあちこちにまだ熟していないスイカが転がっています。畑の掛け小屋で宿題をしている姿は、はるか過ぎ去った子供のことを思い出させ、なんともいえぬ感慨を呼び起こす特別な詩情があります。私はそんな気持ちに駆られ、ちびっ子姉弟が小屋の中で勉学に励んでいるところや瓜畑にいるところを何枚かカメラに収めました。

母親もいつの間にか来てましたので、「亚亚は本当にいい子だね。こんなに小さいのにもう大人の仕事を手伝えるんだね。」と褒めて言いましたが、母親は聞き流して「あの子達はしぶしぶやっと瓜畑に来たんですよ。窰洞の中にいるほうが涼しいって…。」「そうなの？」私が亚亚の方に顔を向けると、くっ、くっ、くっと銀の鈴を振るような天真爛漫な笑い声が返って来ました。

何日かして、私は又南塬村を訪ねました。知り尽くした道を辿って村はずれの亚亚の西瓜畑の掛け小屋に行きますと、亚亚は丁度遊んでいて、父親とお姉さんも一緒でした。私は彼らを一緒に写真を撮った後、ついでに別のところの撮影に行くことにしました。今日は畑は大人の目があるので、亚亚は自分の好きなように時間を過ごしてもよいのでしょう、畑の間をぴょんぴょん跳ねながら私についてきて、時折私の小さなモデル役を務めてくれました。トウモロコシ畑や、スイカ畑での撮影で人影が欲しいと思う時、亚亚を手招きすると小鳥のように喜々と畑の中に跳んで行って、私の望むままポーズをとってくれます。道すがら摘んだ野菊の花を手に上機嫌で私のカメラのレンズに飛び込んできたときは、一幅の絵画を感じさせる作品になるに違いないと素早くシャッターを押しました。

歩きながら亚亚とお喋りしました。このあたりの子どもたちが遠くに行く機会はあまりありません。私が亚亚に延安に行ったことがあるか訊ねますと、もう、三回も行ったといいます。それで、お姉さんや弟も行ったことがあるかどうか訊ねますとそれはないとのこと、不思議に思って、「お父さんは亚亚を一番可愛がっているの？どうして、亚亚だけを延安につれて行くの？」と訊きました。亚亚は頭を傾げて言いました。「私を延安に連れて行くのは病院に行くためなの、目を見てもらうため。」この時になって、私はやっと彼女の左目が少しおかしいことに気がつきました。寄り目のような、斜視のような、道理で亚亚と接していてなにか落ち着かない感じがしていたのです。しかし、亚亚の笑顔があまりに天真爛漫なので、その感じがどうしてなのかあまり深くは考えていませんでした。

陝北の農村の子どもたちは、滅多に村の外へ遊びに連れて行って貰う事はありませんし、まして夏休みのキャンプなどは言うまでもありません。外出などは治療のためぐらいです。私は仔細に彼女の目を見ると、「この目は生まれつきなの。ものを見るのには困らないわ。」と真面目な顔で言いました。

その後、私は数回、南塬村に行きました。学校に行く途中や、放課後の帰り道、畑にいるときとか、同級生と一緒だったりの偶然の出会があり、いつも必ず亚亚をカメラに収めました。ある時などは瓜畑の掛け小屋の前で、亚亚と遊びに来ていた他の二人の同級生が私を見かけ、自分たちの方から「写真を撮って」と呼びかけて来ました。私は当然ながら喜んで彼女たちの希望を叶え、亚亚というこの国語係りの小組長の面子を同級生の前で立ててやりました。何日かして、「友達は写真気に入った？」と、亚亚に訊ねますと、「まだ、他にも写真を撮って

欲しいって人いるよ。」という答えでした。

2003年4月、サーズのため、陝北での二年にわたる仕事に終止符を打つのを遅らせました。この期間を利用してもう一度、ずっと撮影し続けて来た何人かの少女たちに別れを告げようと南塬村へ行きました。村はずれの、菜の花がいちめんに咲く畑に亚亚を立たせ広角レンズでその風景を撮影しました。空は晴れたり曇ったり、光が射して明るくなったり陰になったりですが、少女たちはいつもよりぎこちなく喋りもしないでいます。私は彼女たちに、今日の写真は多分一年経ったら届けに来るよと伝えました。彼女たちは皆分かったと頷き、最後に村の入り口まで送ってくれました…。

2004年7月、私は又南塬村に足を踏み入れました。一年以上の間に、学校を退学したり、父母と一緒に一家全員で他所へ引っ越してしまっている少女もいました。しかし、亚亚は変わりなく、私を見ると相変わらずの天真爛漫な笑顔で迎えてくれました。窑洞に入ると丁度頭より大きなドンブリを抱えてご飯を食べているところでした。私が、「一回の食事にずいぶん沢山食べるんだねぇ」と言うと、相変わらずの銀の鈴を振るような笑い声が返って来ました。

（田井光枝訳）

▼原文

亚亚

寻找亚亚是件有趣的事。2001年8月的一天，我揣着南塬村几个娃娃的照片进入村庄，在热心的小朋友的指引下，来到了村尾老核桃树下的一排窑洞，这里便是亚亚的家。她母亲说娃在瓜地里看瓜哩，并指了指方位。顺着方位，来到起腰高的玉米地，远处隐约呈现一个草棚，走近一看，这是一个用四根木头支撑起的三角形草棚，中间搭着几块木板，左右用破布和杂草遮挡着曝晒的阳光。一个女娃和一个比她小的男娃坐在里面看书，同行的娃娃说这就是当年站在桃树下的亚亚。那时她在我的镜头前，显得十分腼腆、怯生和害羞。和在场的调皮的男娃形成了鲜明的对比。而此时的亚亚，拿着照片，有说有笑，模样也比以前俊巧多了，弟弟东东也咧着个兔牙在旁憨笑着。

烈日下的瓜棚阵阵热风吹来，瓜棚四周一片绿油油的瓜秧，瓜秧旁颗颗、点点散落着尚未成熟的西瓜。多么有特色，多么有诗意，在瓜棚里做作业更会令许多人触景生情，遥忆童年。我抓住这气氛为小姐弟拍了几组照片，又在瓜田为她们拍了几个镜头。这时她母亲不知啥时也来了。我夸奖道："亚亚真懂事，这么小就会帮大人干活了。"她母亲不屑一顾："她们才不愿来瓜田呢，只图窑里凉快。""是吗？"我认真地回头看看亚亚，回答我的却是"咯、咯、咯"一串银铃般天真无邪地笑声。

过几日，我又一次来到南塬村，再次来到村后亚亚家的瓜棚，亚亚正好在玩耍，同时还有她父亲和姐姐，我为她们拍了合影后，随即转往别处远景拍照。可能是今日瓜棚有大人看守，亚亚居然尾随我一道在田间蹦蹦跳跳，还不时充当我的小模特。当拍一块玉米地，一片西瓜田需要有个人形时，手一招亚亚便像小鸟一样欢快地跑入其中，任我调度。当亚亚手捧一路采摘的野菊花，兴高采烈地进入到我框定的构图里时，我激动地揿下快门，我预感这会是一幅绘画性极强的作品。

一路和亚亚拉话。这里的娃娃很少出远门。我问亚亚去过延安吗？她说去过，还去过三次。我问姐姐和弟弟去过没有？回答说没去过。我顿时好生奇怪地问道："你爸爸最喜欢你吗？为什么只带你一人去延安？"亚亚将脑袋一偏："带我去延安看病，看眼睛，"这时我才注意到她的左眼有点问题，像是对眼，又像是斜视，怪不得平时接触时感觉有点异样，但又被亚亚天真无邪的笑容所感染，未往深处去想。陕北农村的娃娃，几乎没有外出游玩的机会，更不用说什么夏令营了。外出一趟也只是为了治病。我再次仔细看着她的眼睛，亚亚却认真地说："这是生下就有的，不影响看东西。"

以后数次来南塬村，只要遇上，总是不忘给亚亚留个影，有上学路上，有放学归来，有在田间，有和同学在一起。一次在瓜棚前，她和另二位来串门的同学在玩耍，亚亚见我来，主动招呼要为她们合影，我当然义不容辞

地满足她的要求，也让她这个“语文小组长”在同学前有面子。日后问亚亚：“同学觉得照片满意吗？”亚亚说：“还有人想照哩。”

2003年4月，因“非典”我推迟结束在陕北挂职两年的工作，利用这个时间，又一次来到了南塬村，和我一直跟踪拍摄的几个娃娃告别。我在村后大片的油菜地里为亚亚拍了个广角风景照片，天气时阴时晴，光线时明时暗，娃娃们也比往日显得矜持、沉默。我告诉她们这次照片也许要过一年后才能拿到，娃娃们都懂事地点了点头，最后她们一直送我到村头……

2004年7月，我终于又踏上了南塬村的土地。一年多的变化让人吃惊，有的娃娃已经辍学，有的随父母举家迁往外地，倒是亚亚没有变，见到我仍是那么天真无邪地憨笑着。进窑时她正端着一个比脑袋还大的碗在吃饭，我说你一顿能吃这么多呀！回答的仍是一阵银铃般的笑声。

周路：1956年生。中国安徽省合肥市在住。
合肥市群集芸術館学芸員。
木版画作家。
陝北の黄土高原に魅せられ、 度重ねて赴き、2001年～2003年、陝北延川県文化局副局長に就任し現地に住む。木版画制作のかたわら民間美術研究及び撮影等にも勤しむ。著書に「陝北婆嫂剪紙」「延川風光」「画家眼中的黄土高原」「陝北紀実」他がある。

何媛媛来信 ⑳

「中山服」(中山装) の由来

hé yuányuán
何 媛 媛

「中山服」(中山装) は、かつて中国の「国服」と呼ばれ、特に1949年建国以後から改革開放までは、公的な場所では、10人に8，9人が中山服の姿でした。

「中山服」は、その名前のとおり、国民党の創立者―孫文、つまり孫中山[1] と深い関係があります。1911年の「辛亥革命(しんがいかくめい)」[2] 前、反清崇洋の知識人たちが多数、日本、ヨーロッパから中国に戻り、相ついで辮髪を切り、清の礼装を脱ぎ、洋風な髪の形にして、洋服を着始めました。

「辛亥革命」の成功後、「辮髪を切り、服装を換える」ということも、改革の要点の一つとなりました。しかし、辮髪を切った後、どのような服装が中国人にふさわしいか広く議論されました。200年間続いた清の礼服を引き継ぎましょうと言う人もいましたが、清の礼服は、生活上いろいろ不便で、生地も贅沢です。ヨーロッパに留学した人々は洋服を着ることを主張しました。それを聞いた孫文は大笑いし、「それは、中国貨をボイコットすることと同じではありませんか？」と反対しました。

そして、孫文は自分でデザインしようと決意しました。中国の寧波服装業界の助けによって色々なデザインを考え、細かく検討した結果、1916年に正式な「中山服」が誕生しました。きっちりと首許を引き締める襟は、圧力と危機を象徴、前の四つのポケットは「禮、儀、廉、耻」の美徳を象徴；袵の五つの釦は国の五権―「行政、司法、立法、考試、監察」を象徴；ポケットの四つの釦は；人民の四つの権利―「選挙、創制、罷免、複決」を象徴；袖口の三つの釦は、三民主義の「民族、民権、民生」の三大原則を象徴しています。

「中山服」のデザインは、素朴ながら端正で、格式もあり、1929年、国民党中央政府の命令で党と政府の役人の礼服として定められました。それ以来、国民党も共産党も「中山服」を礼服として着続けて来ました。特に毛沢東の時代は、どこへ行っても指導階級の人々は、殆ど青色や、灰色の「中山服」でした。

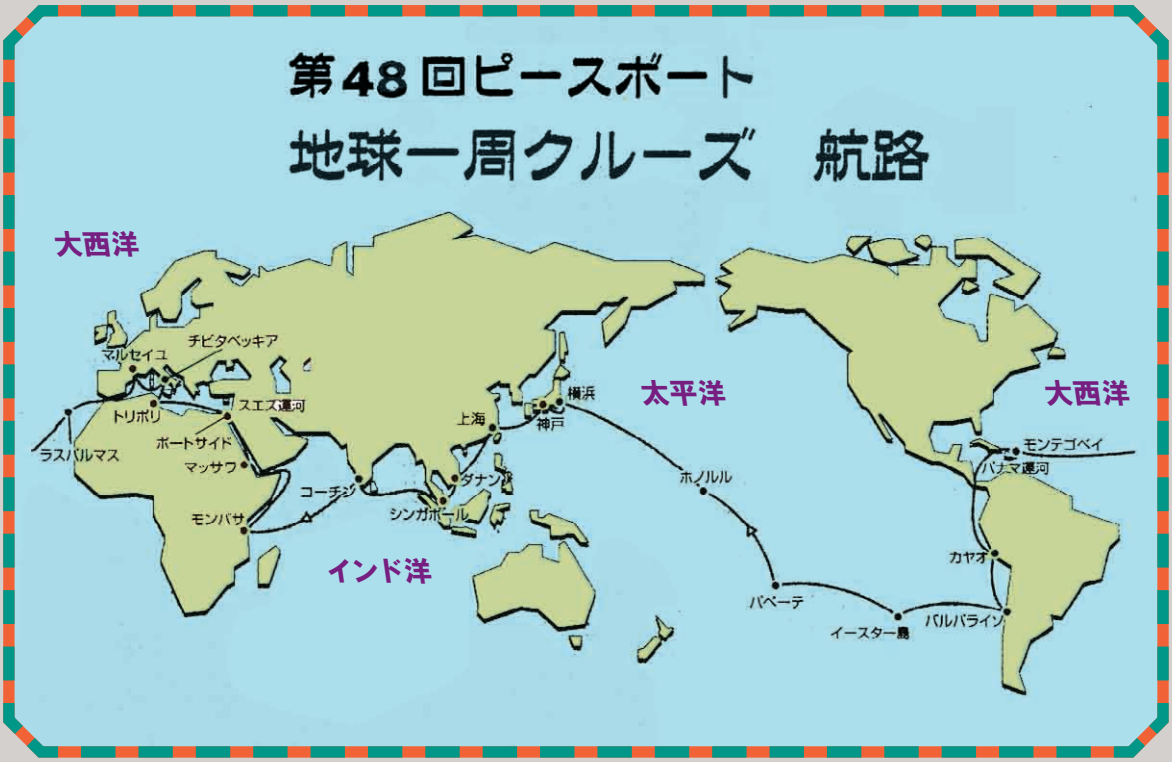
時代の推移と共に「中山服」は歴史を記念する服装になり、古董品になってしまいました。アルバムには、私自身の「中山服」の姿も残っています。中国がまだ「中山服」時代だった少女の頃、中山服を着た男性たちの、逞しくきりりとした姿が羨ましく、父の服を借りて写真館で撮ったものです。その写真を見るたびに、時代の流れに纏わるいろいろ複雑な思い出が頭の中に浮かび上がってきます。

注1）孫文（1866～1925）　中国の革命家。日本に亡命中、中山樵（なかやまきこり）と名乗ったことにより、中山と号し、中国で敬称の際は孫中山と呼ばれる。
注2）辛亥革命　中国で清朝を倒し、中華民国を立てた革命。辛亥とは1911年の干支である。

何 媛媛：本名、何 向真。
山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヵ谷町在住。

ピースボート105日間の旅 Ⅸ 〈弱者にはそれほど優しくなかったピースボート①〉

木之内せつ子



5回目までは、ピースボート乗船中に書いて寄港地から送っていたが、6回目以降は、下船してから日記や備忘録を見ながら書いてきた。しかし下船して半年も経つと、思い出や感激も薄れてきて、正直のところ書く意欲がなくなってきた。前回までの続きだと、パナマ運河、カヤオ（ペルー）、バルパライソ（チリ）、イースター島（チリ領）、パペーテ（タヒチ・フランス領）、ホノルル、そして横浜と、残り40日余の旅が続くのだが、それは、航路図だけということにしたい。今回と次回で、帰国数日前の大荒れの太平洋上で書きとめておいた、ピースボートへの全般的な“感想“（クレームがほとんどだが）で締めたいと思う。

「参加資格はいっさい問わない。年齢、国籍、職業、障害のあるなしも関係なし。誰でも自由に参加できる場。みんなが主役で船を出そう。」パンフレットのそんな言葉に誘われて、かなりぎりぎりになって申込んだ。定期的に通院し服薬している者は、診断書を提出して乗船が許可される。私もそのひとりだから弱者の側に入るだろう。

特別なことは何もしないで、ただボーッと105日過ごしたい、それが私の乗船理由だったが、実はもうひとつ目的があった。リウマチの友人が、数年後にピースボートに乗りたいと言っているので、その下調べをしてこよう。彼女が乗るときに、まだ私が元気だったら、サポーターとして再度乗船してもいいかなとも思っていた。

4日以上の船旅をしたのは今回が初めてなので、他のクルーズと比べることはできないが、結論から言うと、私はリウマチの彼女に、ピースボートの旅を勧めない。トパーズというこの船の構造が、弱者向けに造られていないということもあるが、たとえ船が替っても、多分“NO”と言うだろう。105日の旅で、私が見たり聞いたり体験したことの中から、気になったことをいくつか拾ってみよう。今回はオプショナルツアー（OP）でのことを書こうと思う。

A夫妻は70歳代。夫は何回か脳梗塞で倒れ、今は右手に杖、左手は妻としっかり手をつなぎ、船内を歩いている。一時期、車椅子で移動していたときもあった。船酔いに耐えながら、小柄な妻がけなげに夫を支えて歩くのを見ると、ついおせっかいにも声をかけてしまう。そんなことから彼らと親しく話をするようになった。A夫妻は、最後の寄港地ホノルルで、“ワイキキビーチのホテルシェラトンでのんびり気ままに過ごす”というOPに参加した。10時過ぎに迎えのバスに乗り、15分ほどでホテルに到着。チェックインまでにはまだ4時間余りある。レストランで昼食をとったが時間を持て余して、近くのショッピングセンターまで強い日差しの中を歩いてきたところで、私とばったり出会った。これからまだ2時間ほど時間をつぶさなければならないとのこと。

海で泳いだりサーフィンをしたりする人たちにとっては何の問題もないだろうが、早く部屋に入ってくつろぎた

い人にとっては、この時間つぶしはたいへんだったと思う。ホテル側と交渉して、早めにチェックインさせてあげられなかったのだろうか。A夫妻は、ペルーからチリまでのオーバーランドツアーでも、マチュピチュを目の前にして高山病で足止めを食ったりして、悔いの残ることがあったようだ。彼らから直接聞いたことではないので、詳細は書けないが…。

ホノルルで“種類豊富な樹木に出会えるのんびりトレッキング”というOPに参加したBさんの話。彼女と一緒に参加した80歳代のCさんは、ホノルル到着数日前に、ツアーデスクでそのOPの申込みをした。そのときに、自分くらいの脚力でも大丈夫か、と尋ねたという。問題ないということで参加したのだが、上りは何とかついでいけたが、下りはどんどん遅れていき、見かねたBさんが、彼女のリュックを持ってやり、後ろからサポートしながら下った。添乗員はそんなことも気づかずに、ずっと先を歩いていたという。旅も後半になるとOPをキャンセルして自由行動をする人が増える。そんな中でOPの申込みをする人がいれば、ツアーデスクは文句なしに受けつけてしまうのだろうが、大きな事故に繋がりかねない。たとえそうなっても自己責任で済ませてしまうのだろうが…。この旅の中で“自己責任”という言葉を主催者側から何回も聞いた。

チビタベッキア（イタリア）で、私は“古代都市遺跡ポンペイとナポリ（1泊2日）”のＯＰに参加した。その中に、今回のクルーズ最高齢者91歳のＤさんがいた。　彼は、故郷の鹿児島がナポリと姉妹都市なので、このOPに参加したという。ピースボートに乗ってからの彼の生活は、夜7時過ぎにはもうベッドに入るとのこと。その日ナポリのホテルに到着したのは夜8時過ぎ、チェクイン前に食事ということになった。彼は夕食を断わり、早めに（といっても8時半くらいになっていたが）部屋に入った。私たちが部屋に入れたのは10時過ぎだった。ナポリまでの途中、ローマ市内をくるくるまわって、車中から観光したが（これは申込み時のコース内容に入っていなかったので、旅行社のサービスか？）、それよりも、日のあるうちにナポリに直行して、観光し、早めにホテルに入ったほうがよかったのではないかと思う。

翌日は、ポンペイ遺跡を見学し、昼食後、5時間かけてチビタベッキアまで戻ってきた。夕食は市内のレストランでということだったが、先客がいてすぐには入れず、ピースボートがすぐ近くに見える公園で、1時間ほど待たされた。その中に91歳のＤさんもいた。8時過ぎの夕食となり、船に戻ったのは帰船リミット10時の2分前だった。シャワーだけの船のキャビンから逃れて、バスタブのあるホテルの部屋でゆっくりする日が、105日間のうち1回くらいあってもいいだろうと、このOPに私は申込んだのだが、移動時間が長くかなり疲れた。

パナマ運河

確かにOPの案内冊子には、移動時間に片道4時間かかるとはあったが、申込みを受けつける際に、もっと詳しい情報を提供し、きめ細かな対応をしてほしかった。すべて参加者の自己責任とせずに、ときには主催者側が、「あなたにはちょっときついですよ」と断わる勇気も必要だと思う。

niān huā wēixiào
松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

苑を掃く新発意の背にまた落ち葉

qīng chén sǎo sì yuán
清晨扫寺园

xīn chū jiā sēng jìng dì miàn
新出家僧净地面

luò yè bēi shàng tiān
落叶背上添

季语：落叶，冬。

新出家的小僧并不是一进门就专修佛法，而是要先做一些杂活。此句写的是小和尚（实际上应为新出家之人，因现在还未成为和尚），清晨在寺庙内扫院子，结果地面干净了，而新的落叶又飘坠在他地背上。

此句饶有风趣，人物和自然浑为一体，平淡中蕴藏着幽默。

ラオスの山からだより V　〈太郎の子ども図書館を作りたい②〉

安井清子　ラオス　山の子ども文庫基金

▶ラオス山の子ども文庫報告

11月初めからラオスに来ています。今回は、いよいよ山の村に滞在して、文庫作りの第一歩です。この“わんりぃ”でも報告を紹介していただいていますが、言い始めてからなかなかはかどらないので、「いったいいつできるの？」と、お思いになる方も多いと思いますが、あせらずゆっくりやろうと思っています。今年、1年目の乾季（2005年11月～2006年3月）に、図書館準備小屋のような小さな建物。そして来年の乾季（2006年10月くらい～2007年3月）に、図書館本体になる建物を建てる。そして、その間ずっと、図書館活動はゴザひいて木陰なり軒下なりからはじめ、また来年は準備小屋の方で小さな規模からはじめていきたいと思っています。図書館なんて言葉、聞いたこともないし、本もろくろく手にしたこともない人が多い村ですから、いきなり外からの力で図書館ができてしまうのではなくて、少しずつ、村の人と一緒に、村ならではの形に作り出していきたいのです。

11月4日より、この山の子供文庫の活動のきっかけとなった太郎さんのお母様の武内桂子さんと、ご友人の横須賀和江さん、及川勝さんの3人が仙台より、ラオスを訪れ、首都のビエンチャンからさらに2日かけて、ゲオバトゥ村も訪れました。武内桂子さんには実際にはじまる前に、太郎の図書館を実際に建てる場所を見てほしいと思っていましたが、それが実現してよかった。やっと一歩を踏み出した気がします。

村の人たちはみんな、「どなたが太郎さんのお母さんかい？」と尋ねては、「この村を訪ねた太郎さんが亡くなったのは、本当に残念だけど、そのお母様がこうして村まで訪ねてくれて本当にうれしいよ。そして、太郎さんが結びつけてくれたおかげで、こうして図書館ができることになって、村の子どもたちも大人たちもみんな喜んでいるよ」と、話しかけました。

武内さんは村の人々に、「息子の太郎がここでお世話になり、ありがとうございました。はじめての海外で、海外での初仕事で来たのがこのゲオバトゥ村でしたが、『いい村だったよ。あんな村だったら、住んでもいいな』と言っていました。それから、とても残念なことに、1年3ヶ月後に息子は事故で亡くなりましたが、その後、安井さんと会って話しているうちに、この村に図書館を作ったら、太郎がそこで生きてくれているような気がしたのです・・・・」と話されました。

村の人たちはうんうんと頷きながら聞いていました。こうして、人がつながり、顔が見えて、思いが伝わり、少しずつ進んでいくのだなと思いました。

明日から再び村に入ります。日本から持ってきた絵本、ラオスで購入した本、文房具などなどを荷物に詰め・・・また、電気もガスもないモンの村で、私と建設担当の鈴木晋作さんが、どんな日々を送って、建物を建て、図書館活動を進めていくことができるのか、はい、本当にいよいよ始まりです。村には電話がありませんが、週に1度くらいは麓の町に下りて、ホームページも更新したいと思っています。たまに覗いて見てください。

（http://www7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko）

▶モンの村でのある日 ― お墓参りと豆腐作り

昨晩遅く、サイガウ爺さんの妹、リアおばさんとみんなに呼ばれているが・・・・が、アメリカからやってきた。サイガウ爺さんを訪ねに来たのである。

朝5時半に私が目が覚ますと、もうみんなすでに起きていた。昨晩も遅くまで話し込んでいたのに、モンの人たちは朝が早い。

私が寝ぼけ顔で顔を洗いに行って戻ってくると、リアおばさんはサイガウや近い親族たちを集めて、お金を配っていた。サイガウに何百ドルかを渡していたようだ。きっとアメリカで自分の老齢年金などをコツコツと貯めたお金だろう。それはそれで大変なことである。

朝飯前に、いろいろな人がくる。リアおばさんは大きな袋をたくさん持ってきていたが、古着がたくさん入っている。「大きさの合う人にあげるよ」と服を配っている。リアおばさんはまるで号令でもかけているような大声で話すので、なんだかすごい存在感である。

ビーとハウと私とリーは、リアおばさんが亡くなったお父さんのお墓で燃やすお金・・・ただの紙だが、舟の形に折った物・・・を折っている。ビーとハウも、しばしばリアおばさんに、「これ、あんたにちょうどいいんじゃない？着てみなさい」と呼ばれては服をためしている。ビーときたら、三つ揃いのスーツをもらっていた。ティーシャツの上に試着して、若い組員みたいだった。彼はなかなかハンサムで似合うけれど、村ではこんな三つ揃い着る機会もないだろうなぁ・・・・と私は内心思う。

舟型に折られた紙。あの世ではお金となる。

折り終わると、お墓参りに行く。リアおばさんの父、すなわち、サイガウ爺さんのお父さんのお墓である。村はずれの山の中に、コンクリートで固めたのがお父さんのお墓があった。そして隣に石を積み上げた墓があった。それは、昨年バイク事故で亡くなった、サイガウ爺さんの末息子ワァのお墓だった。2つの墓は草におおわれて

いたが、ワァのお墓からは、何だか悲しみが伝わってくる。ただの石を積み上げただけで何の墓標もないが、ずっと前に年老いて亡くなった人とは違って、若い人の死には生生しさがあり、お墓からも痛ましさが伝わってくるのだった。

リアおばさんは、舟型の紙を燃やしながら、「お父さん、あの世にお金を送りますよ。だからこのお金を使って、楽な生活をしてくださいね。トゥーマートゥッケー（家来）をやとって、楽してくださいね〜お父さん〜、お金を送りますよぉ」と言って、折ったばかりの舟型の紙を燃やした。魂よやすらかに・・・というのとも違う。あの世で金持ちになって楽に暮らすのがいいという、モンの世界観なのだろう。

墓参りから戻ってくると、サイガウ爺家の嫁たちが豆腐を作っていた。朝から大豆をつけていた。唐辛子も一緒に水に浮いている。

まず、水につけた大豆を石臼で挽く。大人４人＋半人前の私＋子ども２人＝6.5（0.5は私）人の人たちが代わる代わる石臼を回した。代わりばんこにやっても、なんて重労働なのだろう。２時間もこの石臼を引き続けるのは、思ったよりも大変なことだった。私は、半分は写真やビデオを撮りながら休んでいるのだが、それでも疲れる。ここまでしないと、豆腐が食べられないのか・・・・と。

②いつもは、豚のえさを煮ている大きな中華なべに、挽いた大豆の汁を入れて煮る。１さじの豚の脂を加え煮る。

③袋に入れて絞る。中にはおからが溜まるわけだ。おからにまた水を足して、おからに残った豆乳分をよくよく絞る。中のおからは炒めて食べてもいいし、豚にやってもよし。

④豆乳を再び火にかける。

⑤豆腐を固めるために、彼らはポー・コオ qaub という豆科の葉みたいであるが、蔓性の植物の葉っぱを森から取ってきて、それを水で２〜３時間煮込んでその煮込んだ汁・・・すっぱい汁を入れて、凝固剤としている。

⑥豆乳（グア・シー・タオ）が煮立ってきたら、葉の汁入れゆっくりかき回すと、おぼろ豆腐のようになった。それを布を敷いたザルでこす。

朝から大豆をつけ、昼前から大豆を挽き、夕方４時過ぎやっと豆腐ができた。もし豆腐屋をやるとしたら、いったい朝作って売るのに何時起きすることになるのだろう？などと考えてしまった。昔の日本の人はどうやって作っていたんだろうか？こうして石臼で豆腐を挽いたのだろうか？それとも日本人は何かしら工夫していたのだろうか？

サイガウ爺家の嫁たち（甥の嫁と、亡き息子の嫁）は、私が豆腐作りを面白がって手伝ったり記録したりしているのを見て、「モンの村にいて面白い？モンの生活したい？」とまじめな顔で尋ねてきた。そう聞かれた時、私は不覚にも一瞬返事に詰まってしまった。あまりに大変だなぁ・・・と内心思っていたからだ。

「お･お、おもしろいよ･･･ちょっ、ちょっとならね･･･でも、ずっととなったら･・・なぁ・・・」

と、私はもごもごしてしまった。

今回、少し手伝っただけでも、豆腐作りの大変さ・・・そして、豆腐を食べられるありがたみ・・・を感じた。今後、モンの村に滞在するに当たって、一日一善ではないが・・・・一日ほんの一仕事・・は手伝いたいものだ・・・と思った。でも、小さなモンの子どもたちが、平気のへーザエモン、へのかっぱ・・でこなしている、どってことない日々の仕事が、実際やってみると、なかなかできない・・・のである。

「ラオス山の子ども文庫基金」支援コンサート

独唱　オオタカ静流

ゲスト：程農化（二胡・高胡演奏家）

2006年1月7日（土）　13：30（開場12：30）

於：池袋・東京芸術劇場小ホール　1

私たちは、子どもたちが絵本やおはなしを通して、未知の世界への扉を開き、心の世界を広げていくことができる場所、同時に、自分たち民族に伝えられてきた伝統やおはなしにあらためて出会うことができる場所、そんな子ども図書館を作りたいと思っています。

（安井清子）

●お楽しみコーナー：12：30より、ロビーでラオス･モン族の美しい刺繍小物などを販売します。

▶前売り：一般4000円　小・中学生2000円　前売りのみ
▶主催：Mother of Earth 協賛：B4-Records/おおたか静流
▶問合せ＆予約：TEL/FAX　03-3706-7325（野口）
E -mail　jedition@k7.dion.ne.jp
http://www7a.biglobe.ne.jp/~laosyamanoko

『ビエンチャン滞在記―11月　ラオス山の子ども文庫基金の現地活動の始まりの始まり』

鈴木晋作

山の子ども文庫の事務所？ は下町にある。

主宰の安井氏のその小さな借家は、トムカンカム市場まで歩いて10分、トン・トゥム寺のすぐ近く。しばらくはここで、図書館プロジェクトの準備を行いながら、ラオスにも慣れていく事になる。ここで、その日常の一こまを綴ってみよう。　（11月、1USドル＝10,800kip）

[1] 市場で米・野菜の購入

ラオスは、お米も野菜もおいしい。もちろん果物も季節のものがある。うるち米1kgが5,000kip、黒米がその1.5倍高価。新米が出たときは、古米よりも新米のほうが安い。

菜っ葉は、片手一束、1,000 ～ 2,000kip。菜っ葉などは味が濃い。日本で普通に売られているものとは、全く違う。形がきれいで洗ってある「きれいな」野菜（ジャガイモ、たまねぎ、にんじんなど）は、多くがタイから。

果物も同様。中国から柿も来ている。市場は、楽しい。市場のあちこちで買い物をすると、両手十指がビニール袋で引っ張られ痛くなる。外国人と一部のラオス人が利用する小規模スーパーマーケットがビエンチャンにも数軒あり、いろいろと食材、日用品も揃う。

一番小さい500kip札はほとんど使わない。　電話代（中国人経営の店、 中国＝1,500kip、 日本固定電話＝4,000kip）、 インタネット代（10分1,000kip）　でも1,000kip以下は大体切り上げられる。

[2] 散髪

美容院で散発すると、15,000kip、軒下でやっているような散髪屋だと8,000kipくらい。美容師さんは日本のNGOのプロジェクトで半年トレーニングを積んだというが、仕上がりは虎刈り気味。「高い！ジェルなんか付けるな、スズキ（どうやら5,000kip追加されたらしい）」と隣のおばさんに言われる。以前東北のシェンクワンの市場の脇では、5,000kipだった。不慣れなおやじさんの鋏使いに、不安を覚え道具を借りて自分で切ってしまった。これも結局は虎刈りに。

[3] 交通事情

山の子ども文庫基金号を購入。HONDAのタイ製で、125ccのスクーター。1,300km走行のピカピカの中古で、1,400USドル。そのほかに道路税（バイ・シアカーターン）、車検（テクニック）、運輸局（コンソーン）の支払いと名義変更の書類（バイ・スーカイ）の手続きを併せて手数料込みで約25ドル。書類が揃っていないと、他県には越境できない。高価なものはドルかタイバーツ払いで。

ビエンチャンの市内公共交通は乏しい。ガソリン高騰化で、ジャンボー（三輪バイクタクシー）の乗車賃（要交渉）も高くなっている。バイクがないと通学、通勤できないという声を聞かれる。確かに、青年が一台ずつバイクを持っているような家庭も稀でない。ビエンチャンは、ここ2年で車の数が増え、しかもきれいな車（タイ製のTOYOTA、NISSAN、ラオス・韓国合弁のKOLAOなど）が増えている。中古車は、個人同士で売買している。市場にある中古車が意外と少ないと思う。

路地からバイクが飛び出てくる。夜は酔っ払い運転のバイクや車もあり、運転は気をつけないといけないらしい。

[4] 向かいの家で小火発生

地域の人で消火した。バイクで4、5分の距離に消防署があるが、消防自動車が来るまでに、12 ～ 3分かかった。到着した隊員は、タバコを吹かし、なんとものんびり。隣のホンペオおばさんが発見し、すぐに人が集まって協力して消火させる。下町特有の地域管理が成り立っているのだろう。

[5] 下町での生活

普段は、ギャーギャー騒いでうるさいホンペオさんも小火発生の時は大活躍。1975年の革命以前は、フランス語教育を受けており、ラオス語、英語、仏語でめちゃくちゃながらなんとか会話が成立する。当時の政治背景から、知人、親戚も難民でアメリカ、フランスに出た人が多いという。タートルアン祭りにも、アメリカから28年ぶりに親戚が訪ねて来て、安井さんとともに食事に招かれた。当面は、この愉快なホンペオさんとその子供達がぼくのビエンチャンでの社会の入り口になりそうだ。

（11月24日　ラオス　ビエンチャン）

野菜売ります

アフリカとの出会いⅤ　エイズ幹線（感染）道路

竹田　悦子　　アフリカン・コネクション代表

アフリカ大陸には幹線道路がある。それは、国境をまたがる数百キロにわたるそれはそれは長い道路である。そのひとつが、南アフリカのダーバンから北上してケニアのナイロビまで延びるモンバサ幹線道路だ。世界に開かれた港同士と結んでいるこの道路は、物流の大動脈であり、その交通量も非常に多い。

さて、私の住んでいたムロロンゴという小さな町。このモンバサ幹線道路のモンバサーナイロビ間を繋いでいる道路沿いに位置している。ナイロビからちょうど40Kmのところにあり、乗り合いバスで30分（ちなみに時速100km以上で走っている）南アフリカまでまっすぐ続く幹線道路。長距離バスも頻繁に通る。ここから南アフリカまでは、ちょうど１週間バスで走り続けると着くらしい。それが、どれくらい遠いのか、それとも思ったより近いのかアフリカ大陸を目の前にすると距離感覚が分からなくなる。

「エイズ」と「アフリカ」の関係は、世界各国のマスコミが報道するように切っても切れない関係である。統計によると、世界のエイズ患者の中のアフリカ人の割合は恐ろしいほど高い。例えば2004年の国連エイズ合同計画のデータによると、新規HIV感染者数は、世界全体が490万人であるのに対して、アフリカでは310万人にもなる。また、2004年のエイズ死亡者数が世界全体が310万人なのに対して230万人なのである。2004年の厚生労働省の日本人HIV感染者が6337人、エイズ患者が3164人というデータと比較すると、アフリカ全土の感染者数、死亡者数の脅威的な数字に愕然とする。

どうしてこんなにも急激にアフリカでエイズが広がっているのか？ 世界の人口のうちの7.5%のアフリカ人がエイズであるという事実。アフリカのエイズの問題は、性教育の質の悪さや遅れ、モラルの問題、一夫多妻制の民族の存在、医療の遅れ、医者不足等々の問題だけからくるのだろうか？ 私には、これらも重要な要素ではあるがこれらだけが理由であると思えない。なぜなら、私のいたムロロンゴという町で見聞きした、エイズが蔓延してしまうような社会情勢が背景にあるからだ。そして、それはきっとほかの町や村でもそうではないかと、推測することができる。

スワヒリ語でMARAYA（マラヤ）という言葉がある。その意味は、職業として売春をすることによりお金を稼いでいる女性たちのことをさす。それは、町の一角の道路沿いに集まっていた。木で出来たあばら家がいくつも連なる。その中心がドアの形にくりぬいてあり、レースのカーテンがかかっている。その後ろに座る女性がうっすらとシルエットとなって映っている。そして客はその前に立ち、カーテンを開け、好みの女性かどうか見極めるシステムだ。好みでなければ、隣のカーテンを開ければいい。そして、見つかれば料金交渉となる。話が決まるとその奥にある部屋へと消えていく。

そして幹線道路沿いのマラヤ街は、そのお客の大半が長距離トラックドライバーというところに悲劇がある。エイズが、幹線道路沿いに感染していくのである。例えば、南アフリカのダーバンを出たドライバーは、ケニアのモンバサに着く間の７日間このような幹線道路沿いの町で宿を取り、食事をし、売春婦を買いながら移動しているかもしれない。そして、ナイロビ近郊の地方からの出稼ぎ者が多い街には、首都ナイロビで仕事を見つけられない人々であふれている。そして売春宿が道路沿いに次々に誕生していくのである。

売春宿は、アフリカだけではもちろんない。どこにでもあるだろう。しかしアフリカのエイズ問題は、それがいろいろな問題へと連鎖的に繋がっていることにあると思う。もし、お客かマラヤさんがエイズの感染者だとしたら感染していくことから発生する農村崩壊、労働人口の減少、貧困の深刻化など経済発展には欠かせない要素が次々と失われていくのである。そして、国の発展までも妨げてしまう事態へとなりかねないのである。

例えば、エイズに感染しているマラヤの彼女。一緒に地方から出てきた旦那もエイズに感染する。子供も感染しているかもしれない。もともと出稼ぎ労働者の彼女たちは、故郷に戻るときもあるだろう。その旦那は、故郷に帰ると一夫多妻だとしたら、別の夫人が待っている。そしてまた感染する。その子供も感染しているかも知れない。そうやって実際に、一夫多妻制が多い西ケニア州では、大人が次々とエイズで死亡し、エイズ感染している子供たちだけが残されている村の存在も報告されている。恐ろしいことであるが、事実としてあるのだ。すべての残った子供を面倒看ている国際援助団体もある。

しかし、その広がりは、四方八方に拡大している。性教育の浸透や、医療の充実や進歩が追いつかない。それよりも、生きるための糧として売春の広がりのスピードのほうが速いのである。貧困が人々を、追い詰めている。なぜ、農村を去って都市へ移住しないといけないのか？ なぜ、売春をする人が多いのか？ この答えを見つけない限り、コンドームを無料配布しても、エイズセミナーをして啓蒙活動をしてもエイズを止める解決策にはならないのではないか？ 実際、コンドームをしない売春のほうが報酬がいいということで、エイズの危険性をセミナーで知っていても使わない女性がいるという事実。売春婦の低年齢化も報告されている。報酬がいいということで、12 ～ 3歳の少女が家族のために売春をさせられているという事実。

さて自分がエイズ感染者であることを隠すことが多いなかで、自らエイズ患者であることを公表し、講演活動をしている女性がいた。末期の症状が出ていてしんどそうな彼女は、講演の中でこう言った。「エイズは、経済の問題です。貧困の問題です。体も痛いです。でも、もっと痛いのは、すでにエイズに感染している子供を残していく心です」と。

エイズは、暗い影をアフリカに落としている。エイズは、モラルのなさ、教育のなさだけからくるのではないことを知ってもらいたい。私は、エイズは体の病気ではなくて、そうならざるを得なかった社会の貧困へのストレスの結果ではないのかと思う。貧困からの経済的な脱却こそ、アフリカでの最大の処方箋ではないのだろうか？

＊＊＊＊＊

マラヤ街を歩いていると、偶然風によってカーテンがめくれた。そのとき、一人の若いマラヤと目が合った。とても素敵な笑顔だったことが私には悲しかった。

講演会「あなたの知らないアフリカの事実―その過去・現在・未来から考える」

要約3 アフリカの現在　　**講師：ガスパレィ ミグィ キルス**（ケニア出身）（アフリカンコネクション）

◆ アフリカの未来

アフリカの問題が解決をするどころか、悪化している事実そしてその理由について、アフリカの現在をお話したことにより理解して頂けたと思います。アフリカの貧困は、決してアフリカ人が働かないからではなくて、働けないという世界の経済的・政治的な仕組みを背景とした「作られた貧困」であることを理解して頂けたと思います。では、アフリカに未来はあるのでしょうか？発展するのでしょうか？ 私は、アフリカ人としてアフリカの問題の解決策を以下のように考えます。

❶ 援助や寄付といった一時的な形の支援だけではなくて、中・長期的視野に立った現在の構造を変えていくような取り組み。例えば、WTOなどに対する先進国からの貿易における不均衡を解消していくような働きかけが必要であると思います。

❷ 飢餓や内戦が続いたソマリアやスーダンからの大量の難民をケニアが国境で受け入れました。そのようなアフリカ諸国がアフリカの問題を自分たちの力で解決していくこと、協力していくことが必要であると思います。そうすれば、新たな悲劇を生むような内政干渉に晒されることがないのではないかと思います。アフリカの問題は、アフリカ人が考えた解決策で解決していくことを望みます。

❸ アフリカ諸国で活躍する多国籍企業の存在は、アフリカ経済に大きな影響を与えています。彼らは大量の雇用を約束していますが、その雇用条件は厳しいもので低賃金・重労働・長時間労働で、アフリカ人の人権を尊重していません。また、これらの企業はアフリカ諸国の政治家たちと癒着しており両者の富の共有が約束されており、労働者に還元されることはありません。富める者はますます富み、貧しいものは働いていてもずっと貧しいままなのです。これらの多国籍企業は先進国においては、環境に優しい、消費者に優しいという方針をとっていますが、彼らがアフリカでやっていることはそのイメージとはかけ離れたことなのです。彼らを取り締まることなしに、アフリカ人を責めることは間違ったことであると思います。

◆ アフリカの希望

アフリカにも希望があります。それは、いろいろな分野でみられます。

❶ アフリカ全土で識字率が上昇し続けています。ケニアでは、小学校の授業料が無料になったことから８５歳のおじいさんも一年生から始めているというニュースもあります。

❷ ケニアの大統領選挙のように長期にわたって政権についていた大統領からの選挙による平和的な世代交代。アフリカ諸国では、まだまだ長期政権が多いゆえに旧植民地政府との癒着や民族主義の温床となり、それが民主的な発展を妨げる原因になっていることから民主的な選挙による変化が求められています。

❸ 中古車輸入、IT,携帯電話などの分野では、アフリカ人企業家の活躍が目立ちます。特にアフリカ諸国における貿易を彼らが促進しています。

最後に、私たちは、植民地の後遺症を引きずっていては発展は見込めません。未来に向かって進んでいくことしかアフリカの発展はありません。

2005年8月18日

講演会より：竹田悦子（アフリカンコネクション）要約

【活動報告】

町田発国際ボランティア祭 2005 夢広場 写真展「世界を知ろう！我々は皆、地球人！」

（主催：2005 夢広場実行委員会　共催：町田市国際交流センター）

第８回町田発ボランティア祭2005夢広場が11月６日、町田市の中心街にある、まちの駅「ぽっぽまちだ」で開催され、町田周辺の、国際支援や友好活動に関わる29団体（出展21団体　ステージ８団体）が集い、支援国の珍しい民芸品や特産物、飲み物や軽食を販売したり、仮設ステージの上では民族音楽や舞踊を賑やかに上演したりしました。

当日は生憎の傘マークつきの天気予報でしたが、どうにか閉会間際まで持ちこたえてくれ、まずまずの人出でした。この日だけしか購入できないものもあり、各団体メンバーは、お互いに買ったり売ったりの交流に励みました。

‘わんりぃ’は雲南白族の藍染めや中国のジャスミン茶、3000ｍ近い高地で収穫される沙棘の粉末ジュ ースの素などを販売。この沙棘の粉末ジュ ースの素は蜂蜜以外の添加物なしで、ビタミンＣの含有量も多く、ヨーグルトと相性がよく、ヨーグルトブームの折でもあり好評でした。

本祭に先立つ、11月１日～５日に、2005夢広場関連事業として、上記写真展を開催。プロの写真家・大久保聡さんの迫力ある、インドや中近東の人々のモノクロ写真36点に、夢広場実行委員会メンバーからの、ネパールやガテマラ、スリランカ、東南アジア、中国など、世界各地の人々の素顔を写した写真を合わせて、100点を越す展示になり、写真展タイトルに恥じない、いい写真展になりました。

町田の目抜き通りに面した、ゆったりした展示場で雰囲気もよく、５日間で470名近い来場者があり、中央のテーブルには自由に閲覧できる写真集を用意し、ゆっくり楽しんで頂けました。また、若い人たちや子連れの家族の来場者があり嬉しいことでしたし、受付に設置のパキスタン地震災害の支援の募金箱に寄付を入れてくださる方も多く、中にはわざわざ自宅に寄付金を取りに戻って入れてくださった方もあり感動しました。

尚、会期中の11月３日は、日本スリランカ文化交流会の為我井輝忠氏による、スマトラ沖地震・スリランカ被害のその後のお話、５日は、和光大学助教授・バンバンルディアント先生によるインドネシアにおける国際協力についての講演がありました。実行委員会の役割分担で、‘わんりぃ’が写真展の企画を担当の関係で、会期中は多数の会員の皆様の協力を頂けましたこと深くお礼を申し上げます。（田井）

2005夢広場募金額：
写真展及び夢広場（1日～6日まで）19,412円
ボーイスカウト町田20団が夢広場当日募金したもの14,051円
合計33,463円

2005 夢広場 開会宣言

お祭終了近くなって降り出した雨の中、元気いっぱい手話ダンスのパーフォーマンスを披露する高校生たち

写真展開上で講演をするバンバン・ルディアント先生

壁面一杯に展示された、いろいろな国の人々の姿

●当写真展には、「陝北女娃」の著者である周路先生も中国から出品くださいました。中国最僻地・陝北の厳しい生活に生きる人々の、歳月を刻み込んだ風貌はすでに哲学者のようです。‘わんりぃ’のHP/周路先生のページに掲載しましたので、ご覧頂ければと存じます。

★★日中藝術研究会12月例会★★

「PRINTING　ODYSSEY 2000-2005 印刷博物館コレクション展」の参観

開館五周年を迎えた印刷博物館では、五万点を超える資料を蓄積したそうです。今回はその精華の一部を公開します。18世紀フランス百科全書原本の展示があると思えば中国民間版画などの展示もあり、印刷文化の奥深さを体験できます。印刷博物館学藝員の解説あり。

◆　解説：緒方宏大氏（印刷博物館学藝員）［予定］

— 記 —

於：印刷博物館　文京区水道1-3-2　トッパン小石川ビル

05年12月10日（土）14：30：会場地下入口集合

TEL.03－5840－2300（500円、招待券数枚あり）

http://www.printing-museum.org/jp/index.html

●交通：ＪＲ飯田橋徒歩15分。バスの場合、都営バス［飯64］または［上69］に乗って「大曲」「東五軒町」下車徒歩3分。

●13：00～14：30まで慶應大鷲見洋一教授のフランス百科全書についての講演会があります。聴講希望者は、研究会事務局にお申し出ください。会のほうでまとめて申し込みます。講演会聴講の方は12：45に地下入口に集合ください。

日 中 藝 術 研 究 会

問合せ：E-mail：nichigeiken@yahoo.co.jp

第8回 国際水墨画交流展

於：日中友好会館・美術館　　入場無料

12月5日（月）～12月11日（日）（休館日なし）

10：00（初日14：00）～17：00（最終日15：00）

主催 … 国際水墨画交流協会

後援 … 中国大使館文化部、中国国立中央美術学院、中国国立中国美術学院　他

中央美術学院から中青年教師を中心とした新感覚の作品が、東洋美術学校からは若さあふれる学生作品などの水墨・彩墨作品を展示。

◆ご予定ください！！‘わんりぃ’新年会

涮羊肉（シュワンヤンロウ）（羊肉のしゃぶしゃぶ）で新年を祝おう！

2006年2月4日（土）　11：00～14：00

於：麻生市民館・料理室

参加費：1500円（食べ放題　福引あり）

今年も残すところ1ヵ月ほどになりました。過ぎてみれば瞬く間の一年です。忘年会やクリスマスパーティのシーズンですし、お正月の準備もそろそろ始めなければと思っていらっしゃる方もいるでしょう。何かと気ぜわしい年末ですが、年が明けたら先ず、涮羊肉で英気を養いましょう！！　申込み：‘わんりぃ’事務局

‘わんりぃ’のおたより会員になりませんか？

入会金なし　年会費：１５００円

‘わんりぃ’は、「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることは、国や民族を超えた理解のきっかけになるのではないか」という趣旨で、市民レベルでの国際友好を目指して1992年より活動している市民ボランティアの会です。

これまで目的に添った講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を数多く開催してきました。

活動の様子は、年10回発行される会報‘わんりぃ’と‘わんりぃ’のＨＰでご覧いただければと存じます。

‘わんりぃ’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わんりぃ’の全ての活動に参加できます。おたより会員の年会費は、1500円で、会報‘わんりぃ’の郵送費と活動のサポート費に充てられます。

尚、インターネットのアドレスをお持ちの方に、カラー版の美しいおたよりをお送りしています。

問合せ：わんりぃ’事務局（1Pに掲載）

民族文化映像研究所　定期上映会　アチック・フォーラム

自主制作・長編記録映画『椿山（つばやま）　ー　焼畑に生きる』

◎　高知県吾川郡池川町椿山　/　1977年　/　16mmカラー　/　95分

12月3日（土）　13：00（開場）　14：00～15：40（映画上映）
15：50～17：00　（話し合いの時間）

於：町田市　勝楽寺（町田市原町田3-5-12　TEL：042-722-3147）

参加費：1000円（小学校以下無料　中学・高校生500円）

終了しました

問合：民族文化映像研究所　TEL：044-986-6461

E-mai：minneiken@dream.com

●四国の最高峰・石鎚山の南方、急峻な渓谷奥の斜面にある戸数30戸程の小集落。平家落人伝説も伝わる。その椿山は雑穀主体の焼畑作業を営々と続けてきた…。

地球環境への反省が深刻な今、それを改めて見つめなおして見たい。
（民族文化映像研究所所長　姫田忠義）

会場（勝楽寺）へのご案内